

古典を読んでみよう ⑥

和歌 わか

春

ひさかたの 光のどけき 春の日に 静心なく 花の散るらむ
紀友則 きのともりのり
ひさかたの ひかりのどけき はるのひに しづこころなく はなのちるらむ

夏

春すぎて 夏来にけらし 白妙の 衣ほすてふ 天の香具山
持統天皇 じとうてんのう
はるすぎて なつきにけらし しろたえの こころもほすてう あまのかぐやま

秋

ちはやぶる 神代もきかず 竜田川 からくれなゐに 水くくるとは
在原業平 ありわらのなりひら
ちはやぶる 神代もきかず 竜田川 からくれなゐに 水くくるとは

冬

田子の浦に うち出でてみれば 白妙の 富士のたかねに 雪は降りつつ
山部赤人 やまべのあかひと
たごのうらに うちいでてみれば しろたえの ふじのたかねに
ゆきはふりつつ

現代語訳 (保護者用)

紀友則

こんなに日の光がのどかに射している春の日に、なぜ桜の花は落ち着かなげに散っているのでしょうか。

持統天皇

もう春は過ぎ去り、いつのまにか夏が来てしまったようですね。香具山には、あんなにたくさんのもっ白な着物が干されているのですから。

在原業平

(川面に紅葉が流れていますが、)神代の時代にさえこんなことは聞いたことがあります。せん。竜田川一面に紅葉が散りしいて、流れる水を鮮やかな紅の色に染めあげるなどということは。

山部赤人

田子の浦の海岸に出てみると雪をかぶったまっ白な富士の山が見事に見えますが、その高い峰には、今もしきりに雪がふり続けています。(ああ、なんと素晴らしい景色なのでしょう。)